愛知学泉大学家政学部　令和７（2025）年度ティーチングポートフォリオ　2026 年 3 月 21 日作成

学科　管理栄養学科	氏名　西　彰子

家政学部の教育目標は、本学の教育目標と教育方針の下、「真心・努力・奉仕・感謝」の四大精神の実践を通して社会的に自立して生きていく上で必要な①スキル・リテラシー・教養等に関する一般的知識・技能と②家政に関する専門的知識・技能と③建学の精神・社会人基礎力・pisa 型学力を統合的に身に付け、社会に出てからは、これらの知識・技能をベースに生涯学習社会の中で自己の潜在能力をさらに開発しながら、職場と地域の課題解決に貢献できる人材を育成することである。

イ　ライフスタイル学科の教育目標は、家政学部の教育目標の下、これからの社会の新しいライフスタイルのデザインを提案することによって、人々の日常生活を衣・食・住の面から支援することのできる人材を育成することである。

ロ　管理栄養学科の教育目標は、家政学部の教育目標の下、管理栄養士の資格を生かして、チーム医療、健康増進・疾病予防、食育・栄養指導又は健康をテーマにした食品の研究・開発等で活躍することによって、人々の日常生活を健康の面から支援することのできる人材を育成することである。

ハ　こどもの生活学科の教育目標は、家政学部の教育目標の下、保育士・幼稚園教諭・小学校教諭の資格を生かして、こどもたちの学力および社会性・社会力の基礎・基本を育てることによって、人々の日常生活を子育ての面から支援することができる人材を育成することである。

1　教育の責任

私は主に栄養教諭養成課程を担当しており、家政学部管理栄養学科の教員としては 2026 年 3 月の時点で1年が経過した。2025年度は、管理栄養学科学生を担当し、教育活動を行った。担当科目【前期】食事設計演習（2AB）60 名、教職課程では、学校栄養指導論Ⅰ（3 年 8 名）、実習指導（4 年）8 名、栄養教育実習（4 年）8 名、共担科目では、管理栄養士への道（1 年 AB）60 名、栄養実習事前事後指導（3AB）71名、給食実習（臨地実習）（3AB）、専門実践実習（3AB）26名、管理栄養士特論 B（4AB）60 名、【後期】教職課程科目では、学校栄養指導論Ⅱ（3 年 7 名）、教職実践演習（栄養教諭）（4 年）8 名、教職特別講座（2、3 年合同）8 名、共担科目では、管理栄養士特論 A（3AB）74名、管理栄養士特論 C（4AB）60 名である。栄養教諭養成の学科科目を担当し、資質向上のための教育を行っている。栄養教諭課程主担当であることから、栄養教諭資質向上の授業はもとより、教員採用試験に向けての支援に注力している。入学生（2025年度生）の担任として、スムーズな大学生活への移行や、学ぶ姿勢の定着に向けて支援してきた。学内委員として教職課程委員会では、教員を目指す学生に対して学校の環境整備を推進する活動を行っている。また、臨地実習委員として、3年生の管理栄養士臨地実習の指導を行った。加えて、管理栄養士国家試験対策委員として、国家試験対策を担っている。社会活動では、蒲郡市食育推進計画推進委員を務めており、蒲郡市食育便り、蒲郡市親子さかな料理教室、第45回蒲郡市農林水産祭り＆食育フェスタ等で、食育推進に貢献している。一色高校における公開講座を担当、オープンキャンパスにおいても模擬授業を実施して、本学の広報に努めている。

2　教育の理念と目的

私は、次のような学生の育成を理念としている。1，自らの能力を高めることができる人。2，自由に考えることができる人。3，互いを大切にできる人。4,獲得した知識を生かし、創造力を持って社会に役立とうとする人。である。一方、自らは、学生に信頼され、学生の自立に役立つ教員であることを目指している。

そこで、学生が自らの能力を高めるための環境を整えることを方針としている。まず、安心して学べる居場所としての授業環境を整える。授業内容を正しく理解し、得た知識を整理する、そこから新しい考えを生み出す創造性を発揮できるようになる。クラスメイトとのピアエデュケーションから、視点が広がり、思考が深化できる。同時に、互いに納得する規律を遵守しながら互いを尊重する姿勢、協働する力、協調性も育まれる。一方、個の力を発展させるための学びの個別最適化に相当する環境整備も教員の務めとして目指している。このような環境の中で、学生が主体的に学び、自らの将来を切り拓く力を身につけることを目指している。

3　教育方法

上記の理念に基づき、以下の教育方法を実践している。

1，　グループワーク（PBL）を活用して、多面的な視点、協働による問題解決、発想力の鍛錬を行っている。（資料 1）

2，　授業では、教科書、学習指導要領、法規を精読していくが、知識の整理を支援するため、notebookLM による要約を提示して学生の理解向上に活用している。（資料2）

3，　演習では、ワークシートを活用して、自ら考え、言語化することを訓練している。（資料3）

4，　学生全員が発言する機会を設定し、学ぶ姿勢を育成している。

5，グループワーク発表では、板書を利用し、共有、比較を行い、説明力、ディスカッション力、判断力を育成している。
6，授業時間を守り、また課題提出期限を守ることで規律性、計画性を培っている。
7，練習問題を提示し、知識の定着を促進している。（資料4）
8，学生へ声掛けを行う。授業時間内外で声掛けをすることで学生の心理的状況などを把握するように努力している。また、個別相談では気持ちに寄り添い話を聞くことを心がけ、学生の学びの姿勢が継続するよう努めている。
9，学生の自由な発想をできる限り、実現可能な形になるようにディスカッションすることを心がけている。

4　授業改善の活動

前期の学生の授業評価から、授業改善に努めた。まず、シラバスと授業の整合性を高めた。学生の学習意欲を向上させるために、多様な学習活動（課題、グループワーク、発表など）の導入を継続しつつ、さらに学生が主体的に取り組めるような工夫（例：テーマの自由度を高める、興味関心に合わせた選択肢を設ける）を検討する。個別のフィードバックや励ましの言葉を意識的に増やし、学生のモチベーション維持・向上を図る。授業時間を超過する可能性のある場合は、事前に学生に伝達して、学生生活の不便が生じないように行った。提出物は、できるだけ迅速に対応して、フィードバックするように努めた。授業中に定期的に学生の理解度を確認する機会を増やし、理解が進んでいない学生へのフォローアップを強化する（例：小テスト、ランダムな質問、ペアワークでの確認など）。授業外学習との連携強化：予習・復習内容については、授業内でフィードバックを行う機会を設けた。また、予習・復習の効率性を高めるための具体的な学習方法やツールの紹介を行った。以上のように、学生の意欲を高め、学習の質を高めるように努力した。学内で実施される FD 研修会も毎回参加し、教育力の向上に努めている。これらの取り組みにより、後期には授業評価の向上が見られ、一定の改善効果が認められた。

5　学生の授業評価

学生の授業評価では、着任直後の前期科目「食事設計演習」では極めて評価が低かった。シラバスとの不一致や、説明の不明瞭さを指摘された。一方、教職課程科目、「学校栄養指導論Ⅰ」、「実習指導」などは、教員の熱意は評価されたが、話し方について改善が求められている。後期では、教員評価は向上したが、回答数が少ないため、評価の信頼度は低い。

6　学生の学修成果

教職課程4年生科目「教職実践演習」は教職課程の総括科目であり、その授業評価は、学生の意欲：4.71、興味の促進：4.71、成長の実感：4.71 といった項目で高い評価が得られており、学生が主体的に参加する授業として一定の成果があったと考えられる。「学校栄養指導論Ⅱ」の回答は、1名のみであったが、全ての項目で5．0であり、学修成果を実感したと思われる。「教職特別講座」では、教員採用試験模擬試験の得点が緩やかながら上昇してきた。以上より、学生の主体的な学びを促進する授業として、一定の教育効果が得られたと考える。

7　授業科目に関連した教材開発

「食事設計演習」では、毎回の授業内容のワークシートを作成し、重要語句や、計算演習など、段階的に学ぶ教材とした8資料5）。「管理栄養士への道」においても、担当回のワークシートを準備し、学生の学びの視覚化に努めた（資料6）。「学校栄養指導論Ⅰ・Ⅱ」では、法規、学習指導要領等の参考資料を notebookLM で整理して提示している（資料2）。印刷物として配布するとともに、classroom にアップロードして共有している。「教職特別講座」では、教員採用試験用教材を構成して毎回配布するとともに、小テストを毎回作成して実施した。「教職実践演習」では、教材をクラスルームで提示し、学生がレポート作成する際に利用できる教材とした。学生が相互評価を行うための授業評価コメント用紙を作成した（資料7）。

8　指導力向上のための取り組み

FD 研修に積極的に参加し、先生方の新しい視点やスキル、努力を参考にして、自らの教育を振り返り改善を行う。また、今年度は、食育と教育課程の在り方、学生の卒業後の社会との接続などをテーマとした講演会に参加し、教職課程教育の指導力見直しを行った。

9　今後の目標

短期的な目標としては、学生の理解度および学習意欲のさらなる向上を図るため、授業内外の学習活動の質の向上に取り組む。具体的には、授業内における理解度確認の機会をより体系的に組み込み、小テストやペアワーク等を通して、学生一人ひとりの理解状況を把握しながら授業展開を行う。また、授業評価で指摘のあった説明の明瞭性について改善を継続し、要点を整理した説明や板書の工夫を行うことで、学習内容の定着を促進する。さらに、教職課程においては、模擬授業や演習活動の質を高め、学生が自らの課題に気づき、改善できるようなフィードバック体制を強化する。
長期的な目標としては、栄養教育および教職課程教育において、学生が「学び続ける力」を身につけ、卒業後も自律的に成長できる人材の育成を目指す。そのために、知識の習得にとどまらず、現場で活用できる実践力の育成を重視し、地域連携活動や実習、演習を通して、社会との接続を意識した教育を充実させる。また、教育実践の成果を振り返り、授業改善のプロセスを継続的に検証するとともに、FD 研修や学外研修を通じて教育力の向上を図り、本学の教育理念に基づいた質の

高い教育の実現に努める。
10　添付資料
（資料1）シラバス、（資料2）教材要約（notebookLM 活用）、（資料3）ワークシート、（資料4）課題シート（資料5）食事設計演習ワークシート、（資料6）管理栄養士への道ワークシート、（資料7）相互評価コメント用紙